

地域活性化と知財マネジメント

吉田国際特許事務所（商工研相談業務委嘱先） 所長、弁理士

吉田芳春



特産品の作り方と商品の全国普及までの参考となるはずです。

2. 歴史文化を活用した長野県

上高井郡小布施町

小布施町は、広々とした農村風景と葛飾北斎をはじめとした歴史遺産を有し、これを町民が暮らしのなかで大事に育み、そして溢れる笑顔で交流する趣旨を町民憲章としています。

小布施町は、長野市の北東に位置する面積一九平方キロの小さな町で、栗・ぶどう・りんご等の果樹栽培が盛んです。栗は、栗おこわや栗きんとん、栗鹿ノ子、モンブランなどのお菓子に加工されています。町内は民家と民家の間に小道が通り、旅行者が民家の縁側でお茶でもてなされるなど、旅行者が住民・生活に触れることができます。旅行者にとっては、町歩きとこれに伴う食事や土産選びが楽しみです、これらを提供する地元企業も伸びています。

文化的には、北斎の肉筆画美術館・北斎館、岩松院（北斎の天井絵）、中島千波館（地元出身画家）などの七施設を、徒歩

Q

当社は地方都市の商店街組合に属しており、地域の賑わい創出が大きなテーマとなっています。特徴的な事例があれば、お教えください。

A

地域活性化の要諦は地域の宝を見つけ出し、それをブラッシュアップして発信していくことにあり、知財マネジメント意識が必要となります。ここでは、私が関与してきた案件を含めて解説したいと思います。

1. 知財から見た弘法大師

弘法大師・空海は七七四年に讃岐国多度郡屏風ヶ浦（現、香川県善通寺市）で生誕し、八〇四年に渡唐、八〇六年に修行を終えて帰国しています。多数の経典や仏像を持ち帰り、その後真言宗を開きました。

「西新井大師」（東京都足立区）や「川崎大師」（神奈川県川崎市）は寺名とは別に「〇〇大師」と呼ばれて、門前の商店街は賑わい、それぞれ年間百億円くらいの経済効果があると考えられます（以後経済効果は筆者推定）。

弘法大師は日本全国を行脚し、多くの伝説・伝承を残しました。こうした「大師伝説」を含めて知財の観点から弘法大師の事績を見てみましょう。

各地には、弘法大師が杖を突くとわき出したと伝えられる井戸や温泉が多数あります。弘法大師は地下の水脈や鉱脈を発見するダウジング技術を備えていたと推察されます。ダウジング技術についての特許出願は三十六件となります。

弘法大師は、高野山をおおられてのち、四国各地の八十八カ

所を巡って霊場を開創しました。現在その足取りはお遍路道として、毎年約三十万人の人間が約一四〇〇キロの距離を徒歩や車等で辿ります。お遍路をツーリズムと捉えると、三十万人×一人二十万円＝六億円の経済効果を概算でき、四国創生への貢献は図り知れません。

さらに、弘法大師は、日本最大の周囲二〇キロのため池（満濃池）修繕を指揮し、当時の最新技術であるアーチ型堤防を採用しています。ため池に関する特許出願は二百二十四件、アーチ構造は特許出願十件となっています。作業者のために讃岐うどんとお灸を考えたそうです。讃岐うどんは特許出願八百八十八件、市場規模二千四百億円、お灸は特許出願五百十件、市場規模一千五百億円です。

この弘法大師の事績は、地方

圏内に整えています。その結果、年合計三十八万五千人（以下データは小布施町平成二十四年度統計より）が入館しています。

異なる分野にわたる行事が年間十五回開催され、多様な人々が飽きずに何度でも来訪できるように工夫しています。

小布施町は、平成十四年の人口が一万一千七百三十四人、平成二十四年の人口は一万一千四百三十三人で、減少率は抑えられています。事業所の産業割合では卸・小売業および飲食宿泊業が四〇%を占め、飲食料品に対する従業者一人当たりの年間販売額は一千二百七十九万円となっています。



小布施町、岩松院の北斎の天井画「八方睨み鳳凰図」
(写真提供=長野県観光機構)

町総合計画」を策定し、「実現可能で持続可能な町、町民が幸せを感じる町」をテーマに掲げ、前記の町民憲章を守って発展し続ける町になっています。

3. 都市間交流と協働による地方創生の群馬県利根郡川場村

川場村は、沼田市と片品村に囲まれ、八五平方キロのうち約九〇%が森林、耕作地が七%の中山間地域です。基幹産業の農業従事者は高齢化が進行して耕作放棄地が増えています。川場村は美しい自然と田園景観を生かした「農業+観光」に活路を見出そうとしています。

一九七九年、東京都世田谷区は「区民健康村づくり計画」を



田園プラザかわば (写真提供=ググッとぐんま写真館)

発表しました。この計画は自然の豊かな山村と連携して、区民の第二のふるさとを求めようとするものです。

関東の五十二市町村の中から川場村が選ばれ、八一年に世田谷区と川場村との間で、「区民健康村相互協力に関する協定」が締結され、文化・教育・産業・スポーツ・福祉等の各分野において区民と村民の交流が展開されました。九二年からは、区民と村民の交流体験活動が始まり、相互理解が深まっています。

世田谷区は、健康村ビレッジ施設をふじやま地区となかの地区の二カ所に建設しています。宿泊者数は年三万六千人となっています（二〇〇九年度）。

観光政策としては、川場村は、D51に体験乗車できるホテルSLを建築し（一九七七年）、ギネス記録となる世界一短い線路でのSL走行を果たしています。八九年には、中心地から車で二十分くらいの場所に川場スキー場を開設しています。

九八年には、川場村は道の駅「田園プラザ」を第三セクター方式で開設しましたが、赤字続

きで閉鎖が予定されていました。そこで村を株主、村内の酒造メーカー経営者を社長とする(株)田園プラザ川場に改組し、サービス業の従業者としての再教育、味の定期的チェックと経営者の承認、村産品の優先販売、定時的な野菜提供システム（一〜二時間ごとの収穫野菜）を徹底したところ、黒字化を実現しました。道の駅のコンセプトは「ファミリーで楽しむ」。来場者は二〇一三年度百五十万人、一四年度百七十万人、一五年度百八

十万人と増加しています。筆者も知財マネジメントを通じて、川場村を支援しています。さらに、一五年五月には、ミラノ万博の際に国際連合食糧農業機関（FAO）において、川場村の農林業の整備を通じて武尊山系の雨水が山から耕作地を通過して川へと流れ、一千万東京都民の水がめとなる自然循環システムへの貢献を図解で説明し、好評を得ることができました。

川場村は、都市交流と協働による地域創生をして発展し続ける村になっています。